

神楽が広島県無形民俗文化財に指定される



昭和29年に、無形民俗文化財に指定された山根神楽団の「剣舞」、梶矢神楽団の「鐘馗」、青神楽団の「神迎え」、桑田天使神楽団の「神降し」も同日に指定を受けました。ほかにも、安芸高田市内の多数の神楽団が県無形民俗文化財に指定されています。

安芸高田神楽の父

昭和22年、現在「新舞」と呼ばれる「新作高田舞」を創作され、神楽が人々にいっそう親しまれるものとなりました。安芸高田神楽の発展に多大な貢献をされました。

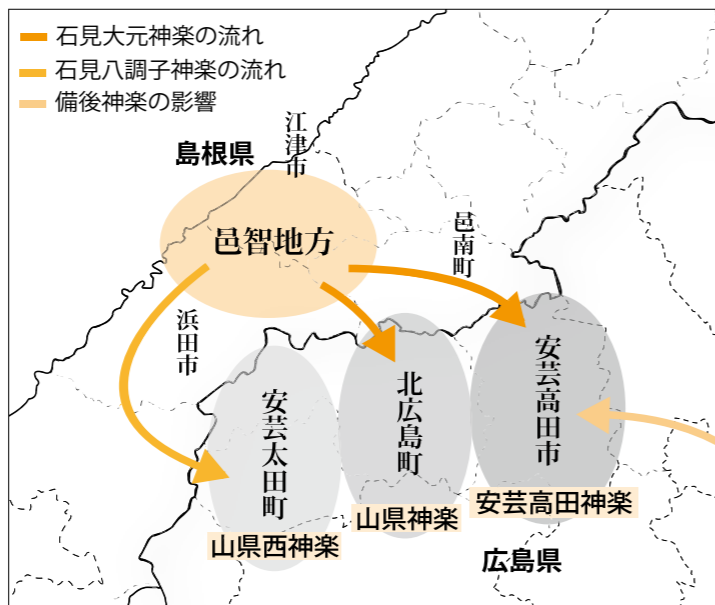


佐々木 順三 氏

新作高田舞の誕生
1945（昭和20）年、日本が太平洋戦争に敗れると連合国軍総司令部（GHQ）は、戦前に舞われていた演目に皇国史観の意味合いが強いものがあつたため、神楽を全面禁止しました。これに対処するため、1947（昭和22）年頃、美土里町の佐々木 順三氏によって「紅葉狩」など約20編の神楽が創作されました。この新作神楽は「新作高田舞」と呼ばれています。この新作高田舞は、従来の八調子の高田神楽

つむ 紡がれた神楽の歴史

安芸高田神楽と山県神楽の伝搬



安芸高田神楽の伝搬

安芸高田神楽は、島根県邑智地方に発生した石見大元神楽が邑智南町方面から安芸高田市へ流入したものと、江の川沿いの島根県邑智南町（旧羽須美村）と高宮町方面で、備後神楽との接触により、梶矢系神楽という新しい神楽の一派が明治初期頃に誕生し、安芸高田市と周辺の町に伝搬した神楽を合わせたものです。安芸高田市の神楽は、石見大元神楽が直接流入した六調子の系統の神楽と、備後神楽の影響を受け、八調子の特徴が強くなるがえる系統の神楽の、2種類の神楽が伝わっている特徴的な地域です。

六調子と八調子の神楽

六調子の神楽は、緩調子のテンポで、奉納本位の緩やかな舞い方であることが特徴ですが、八調子の神楽は、急調子のテンポで、演劇性が強くテンポの速い舞い方であることが特徴です。

安芸高田市の神楽団

現在、安芸高田市には22の神楽団があります（美土里町…13神楽団、高宮町…6神楽団、吉田町…2神楽団、八千代町…1神楽団）。そのほとんどが各地区、各集落の神社（氏神）を中心として分布しています。神楽団はプロではないため、団員は仕事の後、週に1〜3回集まって練習し、週末は神楽門前湯治村の定期公演やイベントなどで神楽上演を行うなど、神楽を中心とした生活を送っています。



特集

神楽とともに生きる

羽佐竹神楽団練習風景

古くから伝わる神楽。全国の伝統芸能が衰退の一途を辿ると言われている中、広島県を中心とした地域では、毎週末神楽公演が行われるほど人気を集めています。多くの人々を惹きつける神楽は、地域で脈々と受け継がれ、人々の暮らしの中に息づいています。

神楽とは

「神楽」の語源は「神座（かむくら）」にあると言われていて、神座とは神を迎える神聖な場所です。太陽、風雨、大地といった自然の現象に存在する神が、人びとの願いによって神座に降りてきます。その前で音楽舞踊を行い、神をなぐさめるのが神楽です。元々は神職のみが行うものでしたが、神楽が庶民の手にも委ねられるようになってから神祇舞（儀式舞）が薄れ、演劇的な能舞が盛んになりました。

神楽の原点

一説によると、神楽の原点は、古事記や日本書紀の中の「天岩戸伝説」までさかのぼるといわれています。太陽の女神、天照大御神が岩戸の奥に隠れてしまい、世の中が真っ暗になってしまったとき、天宇受賣命が女神を誘い出すため、岩戸の前で踊った舞が、神楽の始まりとされています。



津間八幡神楽（神幸神楽団）「岩戸」

の作法にのっとったものですが、内容は全て劇仕立てで、堅苦しい舞の作法をぬきにした、親しみやすい神楽となりました。そのため、新作高田舞は、終戦後の娯楽を求める風潮にあいまって、周辺市町村に広まりました。

現在では、広島県内のお祭りやイベントでみられる神楽公演に多く新作高田舞が舞われており、新作高田舞を新舞、それ以前に舞われていたものを旧舞と呼ぶ人が増えています（それまでは、六調子の神楽を旧舞、八調子の神楽を新舞と呼んでいました）。

*皇国史観：日本の歴史は万世一系の天皇によって形成されてきたという歴史観